



ニッポン
ドクター和の
臨終図巻

人は、人生最期の瞬間に誰の顔を思い出すのでしょうか？ もちらん百人百様でしょうが、一番多いのは、母親なのではないか。男性の場合は特に。認知症が進行した男性が、妻や娘のことを母親と間違えるようになるのも、よくあることです。

先日この人が、舞台『日本昔ばなし 貧乏神と福の神』の恩返し』の発表記者会見に登場。作品にちなんで「恩返ししたい人はいますか？」という記者の質問に、「こんなことを仰っていたのが印象的でした。「いかりや(長介)さんにはしたくなかったです(笑)。やっぱりお母さんですね。僕のために一生懸命おぼけてくれたので。十分報いることができなかったの。今からでもおぼければ」今は「お母さん、今からでもいい、恩返しをしたい。その気持ち僕にも痛いほどわかり、ついホ

278 コメディアン 仲本工事



交通事故で…最愛の母の下へ

長尾和宏(ながお・かずひろ) 医学博士。東京医大卒業後、大阪大第二内科入局。1995年、兵庫県尼崎市で長尾クリニックを開業。外来診療から在宅医療まで「人を診る」総合診療を目指す。この連載が『平成臨終図巻』として単行本化され、好評発売中。関西国際大学客員教授。

この記者会見が10月7日。それからわずか12日後の10月19日、コメディアンで俳優の仲本工事さんが、横浜市内の病院で亡くなりました。享年81。死因は、前日の交

通事故による急性硬膜下血腫との発表です。仲本さんは18日の朝、横浜市内の交差点を歩いて横断していたところ、73歳の男性が運転するワゴン車と衝突。すぐに救急搬送され頭部の緊急手術を受けましたが、そのまま意識は戻らず帰らぬ人となりました。急性硬膜下血腫とは、転倒や転落、交通事故などによって強い力が頭部に加わることで、脳を覆っている硬膜と脳表との間に出血が

生じる状態のこと。同時に脳挫傷など脳が損傷を受ける場合がほとんどのため意識もなくなりま。この状態の人が搬送されてきた場合、直ちに開頭手術で血腫を除去することになりますが、医療が進歩した現在でも、死亡率は60%以上。助かった場合でも、予後は非常に悪く、社会復帰できる人は20%以下というデータもあります。僕の母親も6年前、86歳のときに道路を横断中に交通事故に遭い、仲本さんと同じ状態で亡くなりました。慌てて病院に駆けつけましたが、脳挫傷のCTを見たとき、すべてを悟りました。主治医に延命は不要と告げましたが、母はICUで5日間頑張ってくれました。あの5日間は、僕ら息子たちが心の準備をするために母が与えてくれた、優しさの時間だったと思います。6年たった今も、寝る前には必ず母の顔が浮かびます。仲本さんも1日頑張って、大切な人とお別れができたようです。今頃は天国でお母さんと抱擁しているんじゃないでしょうか。